

第12回ワークショップ記録

びわ湖大津歴史百科 第12回ワークショップ

「中世の神仏習合世界と園城寺」

講師：高島 幸次（大阪大学招聘教授）

内容：講演／見学（三井寺文化財収蔵庫、国宝 勸学院客殿）

日時：2018年12月1日（土） 13:20～16:30

場所：三井寺事務所（〒520-0036 大津市園城寺町246）

参加者：43名



【講演概要】

我が国では長く「神仏習合」の時代が続いたあと、明治維新に伴って「神仏分離」政策がとられたことは周知でしょう。しかし、神仏がどのように習合したのか。習合の結果として、仏教と神道はどのように変化したのか。また政教分離がまだ謳われていなかった時代に、政治権力は仏教・神道にどのように関わったのか。これらについては意外に知られていないようです。本日の講演では、神仏習合下における藤原氏と菅原氏、延暦寺と園城寺、北野天満宮と太宰府天満宮などを視野に入れながら、政治権力・宗教権力を貫く対立・連立の姿を紹介しながら、中世における園城寺の意味を考えたいと思います。

【講師プロフィール】

高島幸次（たかしま こうじ）

1949 年大阪生。龍谷大学大学院文学研究科修士課程修了。夙川学院短期大学名誉教授。大阪天満宮文化研究所員、NPO 上方落語支援の会理事、一般社団法人おしてるなにわ理事、などを務める。近江地方史および天神信仰史を専攻。『新修大津市史』『草津市史』『長浜市史』『甲賀市史』『野洲の部落史』など数多くの地方誌史に執筆。著書に『大阪の神さん仏さん』（140B）、『奇想天外だから史実—天神伝承を読み解く—』（大阪大学出版会）、『上方落語史観』（140B）などがある。2012 年大阪市民表彰（文化功労）。

【講演内容】

はじめに

こんにちは。高島でございます。久しぶりの近江です。今ちょっと福家さん（園城寺執事長）からご紹介いただきましたが、私、学生時代からずっと近江の地方史ですね、特に戦国時代から江戸初期をやっておりました。で、その関係で講演会っていうのも若い頃はずっと滋賀県で講演することが多かったんですが、何なんでしょうね、気がつく、やっぱり生粋の大阪生まれ大阪育ちで、あっちの笑いの世界に入り込んでしまっていて、よくないなあと反省はしてるんですが、そんなこともあって今日久しぶりで、お話いただいて、何お話ししようかと思ったんですが、いろいろ私考えることがありましてね。っていうのは、もともと近江の国やってましたときに、大学が龍谷大学なもんですから、先生たちがみんな仏教史とか、浄土真宗の歴史やってる関係で、この『新修大津市史』っていうのも書かしていただいたり、だいたいそういえば市史はやりましたね。『草津市史』や、『長浜市史』や、『高島町史』、『今津町史』、山ほどやりました。ただそれやりながら、一つ気になることがあった。

それは何かっていいますと、この滋賀県っていうのやっぱり、このお山の麓っていうことで、天台宗のお寺が多かったはずなのに、戦国期ぐらいに浄土真宗の蓮如さんが出てくると、天台宗のお寺だったのが浄土真宗に変わったりってお寺も、すごく数多いんですよ。で、そのときにただ単に宗派が変わったっていうだけかなと思ったら、実はこちらのお山は、今日お話しますが、ものすごく神様も大事にされているし、まさに神仏習合のお山なんですよ。ところが浄土真宗っていうのは日本の仏教の中で、最先端の、神仏の融合を嫌う、嫌う言うたらいかんかな。言葉気つけなあかんですね（笑）、を避ける。「神祇不拜」という言葉が浄土真宗の基本にあるんですよ。うちは仏教なんだから、神様は拝まないっていうね。そういうのがあるんです。そうすると私にしてみたら、こないだまで天台系で、で、次の日から浄土真宗になって、その神様の扱いどうなんだろうっていうことは、すごく気になってたんですよ。

そのうちに、近江のことずっとやってるうちに、偶然なんです、ある先生の関係で大阪天満宮が、大阪天満宮の歴史の本を出したいということで、手伝わないかって言われましてね。私にしてみたら、しめたと思ったんですよ。っていうのはやっぱり、日本の宗教を語る限りは、日本の研究者って全部仏教史の専門家とか、あるいは浄土真宗の専門家、あるいは日蓮宗の専門家っていうふうに、非常に狭い。で、神道史はっていうと、神社界のことばかりやっている。

で、ちょっと大きな言い方で、私、時々ほら吹きますから気づけて聞いてくださいね。おっきな言い方になりますが、龍谷大学出といて、で、一通り仏教史の勉強しといて、で、それから天満宮、天神信仰のことやると、これ両方またげて、いろいろ今までの研究者が見えないことが見えてくるんじゃないかっていうふうなことを考えました。で、喜んで行きました。そしたらやっぱり研究って面白いですね。天満宮のことずっとやっていると、先ほどもお話しいただいたように、こちらの『園城寺文書』、こちらの史料集 7 巻に携わってた人間がですよ、大阪天満宮のことやったら、それと関係ないように思うでしょ。ところが天神信仰っていうのはものすごく園城寺、三井寺とかかわりが深いんですよ。それは私が大阪天満宮に呼ばれて行ったときに予想してたことでは、全くありません。全くそんなこと考えてもいなかった。研究っていうのはそういう偶然によって進むっていう部分あるんですね。今年ノーベル賞取られた本庶佑先生がおっしゃってたんですが、やっぱりあの先生の研究も、実は偶然が入ってるんです。で、すごく優秀な研究者がものすごい努力をして大きな成果を生むっていうことよりも、偶然見つけたことから生み出された成果のほうが大きいことが多いんですよ。何かこんなこと言うと、今日私がお話することは、むっちゃくちゃ大きな成果のように聞こえますが、まあ、そう聞いてもらっていいです(笑)。そんなこともありましてね、だから今回のお話いただいたときに、本当は、最初なんでしたかね、「戦国期の園城寺」かな、なんかでお話いただいたんですが、ぜひ今日のこのお話を聞いていただきたいって気がしまして、で、こんなタイトルを決めました(「中世の神仏習合世界と園城寺」)。

まず中身に入る前に、ちょっと今から皆さんに前提として聞いていただきたいのは、今から私のお話聞くとときに、このレジュメをご覧になって、「きっと何か今日小難しい話しはるんやろう」とか、わろうてはるからきっとそうなんでしょう、「難しい話大丈夫か、ついていかれないんちゃうかな」とか思うでしょうが、やっぱり講演する限りは、あんまり簡単なこと話すのは失礼です。かといって、難しいことを難しいまま話すのはもっと失礼なんですよ。で、こんなご存じですかね。一流の講師、二流の講師、三流の講師っていうのがいるんですよ。で、難しいこと易しく話すのが、一流の講師なんですよ。で、二流の講師は、難しいことを難しいまま話します。で、三流は困ったことに、どうでもいいことを難しく話しよるんですね(笑)。言うときですが、四流はいないのか。易しいことを易しく話す。こんな人は呼ばれません。そんなん、講演する資格ないです。私、別に自分で一流だっていう気はないですが、かといって二流でもない。1.5 流を目指しますので(笑)、いいですか、レジュメほどは、レジュメから受ける印象ほどは難しい話にはならないようにしようと心がけますので、皆さんもそのつもりでいてください。そのつもりでお聞きください。

そのつもりで聞いていただくためには、皆さん、ジェームズ＝ランゲ説っていう心理学の学説をご存じでしょうか。これもちょっと事前に話したいと思うんです。今のこの話一つ、ちょっと頭に入れといてくださいね。「難しくないんだ、易しく話してくれるんだ」って期待を持ちながら聞いてください。期待に反した場合どうなるかっていうことは、次の話になります。その 2 です。ジェームズ＝ランゲ説っていうの、これウィリアム・ジェームズとカール・ランゲっていう 2 人の研究者が同時に同じような成果出してるんですが、私、この本読んで、すごい意外だったですね。「人間っていうのは悲しいから泣くのではないんだ」と。「泣くから悲しくなるんだ」ってんですよ。ほんで、私、そんなことないでしょうと。悲しいから泣くんでしょと思ってたんですよ。で、これすごく私の頭の片隅に残ってたんですが、あるとき、大学で講義してるときに、真夏の暑いときでしたが、あまりにも日差しがきつからカーテン閉めてました。で、何かの加減でカーテンが揺れたんでしょね、その隙間から日差しがぱっと入ったんです。で、私、こっち向いて講義してますから、わかんないです。ところが何か日差しがカーテンの関係でぱっと入ったもんだから、私、ぱっとよけた

んですよ。そしたら学生が、「先生、何してるんですか」って言って、学生のほうがびっくりしてんですね。で、私、よけて、ああ、日差しだったんだってということで、よける必要なかったってこと、気づくわけですよ。でもこれ考えてみたら、例えば弓矢が飛んできててもそうですよね。石が飛んできててもそうですよね。何かわからないけど、先によけますね。ほんで、あとで見たら、よけるほどのことではなかったってことがあります。ということは何だっていったら、人間ってというのは、このアとイと見ていただいたらわかるんですが、アが今皆さんが思っておられることです。

「何か悲しい映画を見た→刺激を受けた→それで悲しくなった→で、涙が流れる」っていう、アのかたちを皆さん思われてると思うんですね。実は違うんだって。イなんだって。「悲しい映画を見た→だから涙出てくるんだ→で、涙出てきたら、悲しくなるんだ」っていう、そういう学説です。いいですか。で、何が言いたいのか。今日の私が、面白い話になるかどうかは、皆さんが面白いと思うのが先ですよ（笑）。こう何か、ふんぞり返って、「おい、何かちょっと面白い話してみろ」って言って、聞いてて、「何や、大したことないやないか」っていうのは、それは皆さん方が間違っている（笑）。いいですか。この言葉だっけ言い換えると、面白いから笑うのではなく、笑うから面白いんだっていう考え方です。いいですか。だから今日の講義に感動していただける、「ああ、今日いい話聞いた」と思っていたらどうかは、皆さんがいい話を聞くんだって姿勢になるかどうかにかかっているんであって、私の話の中身ではないです（笑）。いいですか。皆さんの責任です。もちろんこっちは努力しますよ。その努力はさっきの1番目にお話しした一流になりたい、難しい話でもわかりやすくお話ししたいって、その努力はします。皆さんの努力は、今日の話は、もう心の準備できました？面白そうと思っただけでした？そうすると面白くなります。いいですか。ということで、あんまりこんなことばかり言っていると、福家さんが、こんなやつ呼んでよかったかなと思いはりますから（笑）、本題に入ります。

一、神仏習合とは-民間信仰と創唱宗教- 1、民間信仰と創唱宗教

今日は園城寺の話もちろんしたいんですが、どこのお寺の話をするにしても、欠くことのできない、抜くことのできない「神仏習合」っていうものについて、意外に教科書なんか書かれてあるものと違うんじゃないかっていうことを思ってます。で、そのことをまず話したいんですね。二つの宗教が出会ったときには、信仰が出会ったときには、それが融合したりっていうの、ヨーロッパでもたくさんありますが、日本の場合の神道と仏教の融合っていうのは、特別な背景があるんですね。それは何かっていうと、ちょっと皆さん聞き慣れない言葉かも知れませんが、「民間信仰と創唱宗教」について、先にお話しいたします。

民間信仰は聞かれたことあるかも知れませんが、で、どんなんだっていうと、1のアに入りますね。中国の道教とか、日本の神祇信仰のように、「民衆の間に自然発生的に生まれた信仰」のことです。ですからそれを民間信仰っていうわけですが、で、特徴は教義がありません。で、教団を持ちません。で、地域共同体に機能する庶民信仰をいいます。例えば教団がないっていうの、わかりやすいことと言うと、もし皆さんのおうちの地元に神社があった場合に、その神社の教団として、信徒さんが集まってるかっていうと、そうではないでしょ。「この地域の神さんだ」って言って、扱ってるだけ。だからそれが地域共同体っていうことなんですね。例えばどうでしょう。日本で一番大きな神様、数の多い神様はっていうと、八幡信仰ですね。八幡教団って聞いたことないでしょ。日本全国に山ほど八幡神社があるけれども、八幡社、八幡宮があるけれども、そこの信者さんたち、氏子さんたち集めて八幡教って、教団って聞いたことないでしょ。つまり民間信

仰っているのは、基本的に教団がないんです。そしてすごく大事なことなんですが、教義がありません。教義がないんです。ですから、あとで詳しく言いますが、例えば天神信仰、天神さんに行って、皆さん学問の神さんだと思って、受験を祈ったりしますね。あれ、ちょっとここから言葉気つけなあかんですね。意味がないって言ったらいかんですよ。意味がないとは言わないけども、学問の神さんだと思うのは、拝む皆さんが決めてるだけです。天満宮サイドに「天神さんっていうのは、学問の神さんだ」って書いたものはありません。全くありません。民間が決めるんです。いいですか。そういうのをいいます。

で、特に厄介なのは、ちょっとここら辺難しい話になるかも知れませんが、大乘仏教が、つまりインドで始まった仏教が、東南アジアのほうと下りて、こっちの北のほうとに分かれてくる、その北のほうの大乘仏教が伝播した地域っていうのは、もともとこの民間信仰がものすごく広まっていた地域です。ほれでその一つの特徴、これは今日にかかわるんですが、祖先崇拝の信仰が全体的に広まっていた。で、多神教、日本の場合八百万の神なんていいますよね。で、アニミズムとか、シャーマニズムとか、もうここら辺は飛ばしてもらっても結構です。シンクレティズムっていうのは「融合する」本質を持った信仰なんです。で、ここら辺は難しいの、飛ばしてもらってもいいんですが、とにかく言いたいことは何だかっていったら、世界中の信仰・宗教、大きく二つに分かれて、一つは「民間信仰」である。で、もう一つの信仰が何かっていったら、イなんですね。

これがちょっと聞き慣れないかも知れませんが、創立記念日の「創」ですね。で、「唱」える。誰か1人の人が、あの教えを唱えて、で、そのできあがったものをいいます。具体的に読みますと、釈尊、お釈迦さんが仏教を始めたとか、イエスがキリスト教を始めたっていうふうに、開祖が決まっている。誰が始めたっていうことが決まっています。で、この教えはこうなんだよってことが決まっています。仏教だったら輪廻転生とか、お釈迦さん説かれてます。で、そういうのが決まっています。その教えのもとで自覚的に入信する。いいですか。日蓮宗でも構いません。天台宗でも何でもいいんですが。その教えの中身を知った人間が、そこにお参りに来るわけですよ。その教義、奥深い教義は無理にしても、ここはこうだということ知ったうえで、そしてできあがった教団があります。そうするとこの「創唱宗教」の一つの特徴は、開祖がいて、教義を説いている。大体その教義っていうの、ものに書かれるんですが。で、結果として教団ができる。こういうふうな宗教のことをいいます。

で、今日お話ししようとする、その神仏の習合っていうのは何だかっていったら、世界的にまれな「民間信仰と創唱宗教の習合」なんです。これは非常に厄介です。っていうのは、創唱宗教同士の融合だったら、お互いの教義を練り合わせて、ここはこうしましょう、ああしましょうっていうことになるけど、片方はゼロなんですよ。民間信仰ってゼロです。ほんで片方は、もう特に仏教史、非常に緻密な教えの体系ができてます。それが合体した場合、どうなるかっていうと、もうお気づきだと思いますが、対等ではないでしょ。実は日本の神仏の習合っていうのは、仏教のもとに神道が取り入れられたっていうふうに考えたほうがいいです。これ全く対等に、両方がせめぎ合ってたっていうのはうそです。そんなせめぎ合うだけの力がっていうか、理論武装が神道のほうにはなかったんです。そういうことをまずわかっていただきたいっていうのが、出だしの一の1の部分です。

一、2、神仏習合

次に、そうすると今みたいに習合したって言うんですが、これも厄介なのは、じゃあ神道と仏教が融合したっていう

けど、融合して習合したら、お互いの影響受けるやないのっていうことなんですね。ほんで皆さんが今思われてる仏教とか、神道っていうのは、既に習合したあとのものですから、厳密に言うなら「習合後の仏教」、「習合後の神道」ってこととなりますね。それ以前のものとは違ってたってこととなりますね。で、そのこと今からちょっとご説明しておきます。6世紀にわが国に仏教が伝来すると、そこに広まっていた日本土着の信仰、これ「神道」とは言わずに、融合する前ですから、私たちは「原始神道」とか「古神道」というふうな言い方をよくしますが、が、混交してしまって、交ざってしまって、ほれでお互いに影響を受けながら、ここがポイントです。お互いの影響受けてます。それで結果的には神道というものが生まれました。それまでの原始神道とか古神道に対して、仏教の影響を受けた神道が生まれました。ということは、今の言い方で気づいていただけるかと思いますが、神道って言った段階で、もう既に仏教の影響を受けてるってことです。いいですか。

で、仏教はどうかって言うと、やはりこの国で教えを広めていこうと思ったら、開祖が説いた教えのままだけでは、みんなに受け入れてもらえないからっていうんで、既に広まっていた原始神道のいくつかの要素を取り込んでしまいます。で、そうして生まれたものは、「日本仏教」といいます。現在日本で広まっている仏教っていうのは、お釈迦さんが説かれた仏教のままではありません。途中で変更してます。で、そういうことを前提に、アとイを書きました。

アには今言いました原始神道、古神道が、神道に変わってしまう話をします。アのところに矢印で、その下に「国家神道」と書きましたが、これはもうご存じのように、明治に神仏分離で、また別の神道になったんですね。国家神道って。この話は今日はしません。もうここまで話すには、ちょっと時間がないんですけど、だからわれわれすごく今、神道っていうのを考えるときにややこしいんですよ。現在の、戦後の国家神道でなくなってからの神道のイメージがあるかと思えば、その前の国家神道の、国の政策のもとでの神道の時代があるかと思えば、その前の神仏習合の時代の神道もあれば、その前の原始神道の時代もあるってあって、すごく神道について話すだけでも厄介なんです。とにかく、そこに書きましたように、そういう原始神道から神道に変わった、その話をちょっと文章アを読みますね。

日本土着の信仰における神々は、山岳森林や河川などの森羅万象、さらに地震とか大風とか、川の流れなど、そういう自然現象すべてに神々がいたっていうのが、もともとの神祇信仰の在り方です。いいですか。もともとはそうなんです。で、時空を超えて意識される存在だった。ここはちょっと説明しないといかんですが、仏教が入ってきたことによって、例えば皆さん、今日こちらの境内に入れば、その聖なる空間、つまりよそとは違うわけですよ。商店街が、100円商店街やってるとことは、ちょっと明らかに違うわけですよ。で、こういう感覚っていうのは、日本の原始神道のもとにありません。人間が生活している、この森羅万象全部が一つの色です。ここからが聖なる区域、ここからが俗なる区域っていうの、ありません。そういう考え方っていうの、仏教が入ってきてからです。しかもこの森羅万象っていうことも厄介な言葉で、森羅万象っていうのはよく自然、大自然っていうふうに言う方ありますが、あれは間違いです。森羅万象の中に、宇宙全部入ってます。近代の人間っていうのは、自然って言うときに、例えばそうですね、太陽のこと、自然の中に太陽があるとは言わんでしょ。あれ何でだっけっていったら、大気圏の内側を自然って言うんですよ。で、その外を宇宙って言って、大気圏の外と内で区別する変な知識が、科学的な知識があるために、森羅万象っていうとどうしてもその大気圏の中を思ってしまいますが、実はその全体を含めて森羅万象です。いいですか。で、そこに神様がいらっしゃるっていう考え方がありました。ですから私の隣にもいるし、その川の水の流れにも神様がいらっしゃるし、大宇宙のあの太陽の向こう、お月さんの向こうにも神様がいらっしゃるって考え方でずっときたんです。日本人はそうしてきたんです。で、そこに仏教が入

ってきました。仏教が入ってきたことによってどうなったかっていうと、ちょっと読みますね。続き読みます。しかし6世紀の仏教伝来にしたがって、仏教が何をもたらしたかっていうと、このお寺、寺院建築ですね。で、仏像を持ち込んだ。ほいで僧侶を持ち込んだ。で、経典を持ち込んだ。そうすると、それまでの神道に係わろうと思ってた人たちが、きっとすごい衝撃を受けたと思うんです。「え？こんな立派な建物造って、ほいで仏さんも？」、奈良の大仏だってできたとき、金箔だって言うでしょ。そういうもの見たら、ちょっと自分たちの信仰の危うさに気づくわけですよ。で、そこで自分たちも神社を造ろう、あるいはご神像、神様の像を作ろうとか考えるわけです。ほいでそれにかかわる神職も作ろうっていうこと考えるわけです。ただ教義については、あまりにも持ち込まれた仏教の経典が膨大で緻密すぎたために、すぐには神道系の教義の作成はできません。そこにもちょっと書いときましたが、教義については、中世以降になってから、伊勢神道とか、吉田神道っていう教義ができあがっていきませんが、先に取り入れたのは、目に見えるハードの部分です。立派な建物とかね。そういうかたちで、できていきます。だから皆さんは神道っていうと、神社があって、神職がいて、拝む対象があってって思われるかわかりませんが、それはもう既に仏教の影響を受けた神仏習合の後だっていうことです。ですから有名なのは、奈良のほうの三輪神社っていうの、あれいまだに神様のいらっしゃる建物ないですね。山の中にいらっしゃるから。ただし拝むところに鳥居があって、拝殿がある。あれ自体は、もう既に仏教の影響です。ただ、山にいらっしゃるっていうのは、古神道の流れですよ。で、そういう神道の中で、今日はちょっと後半で天神信仰の話をするので、その天神信仰における神仏習合の影響も話したいと思います。

天神信仰っていうのはご存じだと思いますが、菅原道真っていう方が神様扱いですよ。神様になっておられます。で、都で右大臣にまで出世されたんですが、藤原時平っていう人が彼を、菅原道真を太宰府に追いやってしまいます。そこでわずか2、3年後に死んでしまうんですが、で、そのあといろんな地震が起こったり、飢饉が起こったり、あるいは道真を太宰府に追いやった藤原氏の一族が早死にしたり、いろんなことが起こって、信仰に祀り上げられていくわけです。ここが大事なのは、民間信仰ですから、誰っていうことありません。漠然としてます。人々がです。人々が、「このちょっと地震続き方おかしいんじゃない？こないだ京都の御所の清涼殿に雷落ちて、藤原氏が何人も焼かれたけど、あれ、あの人たちって道真公を追いやった人ちゃうのん？」っていう、そんな考え方です。「こら、あかんで、祀らなあかんで」、誰が言い出したわけでもありません。ここが決定的にお釈迦さんが説いた仏教とは違うのわかりますね。で、そしてできあがったのが天神信仰なんです。最初はもちろん御霊信仰、つまり道真公の霊を鎮めるためっていう信仰でした。ほいで、しかも当時平安時代にもものすごく疫病が、具体的にいうと天然痘なんです。疱瘡が12年に1回ぐらいずつ大はやりするんですが、それを鎮めるための神様としても持ち上げられていきます。で、誰がかかっていうと、もう一回言いますが、誰でもない。一般、民間の一般的な知識です。

で、学問の神さんっていうことと言うと、もうお気づきだと思いますが、平安時代の中頃にできた天神信仰を学問の神さんだっていったら、誰が拝みに来るんですか。学問してる人、誰もいないのに。そうでしょ。貴族たちは家柄によって出世が決まっている。一般民衆はいうたら、学問する余裕なんてないわけです。ですからあの頃は疫病退散とか、怨霊を鎮めるための信仰として生まれました。で、結果どうということになるのかっていったら、天神さんは何の神さんだっていったら、その時代の人々が、その都度変えていきました。関心に基づいて。ちょっとこれもう整理しきれないから、名前羅列しましたが、荒人神（現人神）であったり、怨霊神であったり、雷神であったり、慈悲の神であったり、至誠の神、正直の神さんですね。これなんかは、鎌倉時代には何か誓うためには天神さんに行って、その前で誓いなさ

いって習慣ができたりますが、で、気象の神、雪冤の神、雪冤っていうのは、無実の罪を雪ぐための神さんなんですね。道真公が無実の罪で流されたっていうことから、誰かが思いついたんでしょう。そうかと思えば、国家鎮護の神であったり、連歌の神。道真公、連歌上手だったんで、勝手にみんな、勝手に言うたらいかんな。素直な気持ちで、そう思って拝むわけですよ。書道の神とかね。孝道の神、ほいで往生守護の神、学問の神とか、受験の神。これ最後のほう、わかりやすいんで、お話します。江戸時代学問の神でしたが、江戸時代に誰一人として受験の神って言ってません。だって江戸時代の受験って、具体的にイメージわかないでしょ。受験の神って言い出されたのは、私、実は団塊世代なんです、いわゆる受験地獄といわれた時代です。あの頃に受験の神になりました。いいですか。近代になってから、新しいご神格が生まれるわけです。これが民間信仰の特徴です。だからこれから先、何の神になるかわかりません。特にこれから日本人の数が減ってきて、受験が簡単にとこの大学にも入れるようになったら、受験の神言ってたんでは拝みに来ないから、別の基を作っていきますね。神道っていうのは、あるいは民間信仰っていうのは、そういう性格を持っています。

神仏習合で言うと、天神信仰についてもものすごく大きな、誰も言ってないことをここで言いますね。何だっていったら、生身で生きていたはずの人間である菅原道真公が、没後神様に祀り上げられましたが、日本の歴史上初めてなんです、これが。それまでは神話に出てくる神様を拝むことしかやってなかったのに、道真公が初めて人間でありながら、神になりました。この発想の基に、何があるかわかりますか。明らかにこれは仏教の影響です。つまり生身の人間であったお釈迦さんが、ゴータマ・シッダールタが、修行の末に仏になった。「え？生身の人間が仏さんになって、拝まれるの？それやったら、八百万の神だけじゃなくって、私たちの中の誰かが神になってもいいんやない？」っていうんで、最初に神に祀り上げられたのが天神さんです。ですから天神さんっていう存在自体が、完璧にもう神仏習合。つまり仏教の知識が、お釈迦さんっていう仏さんが生まれたっていうことを聞いてなかったら、日本人の発想にはなかったことをやったんです。もうまさに天神信仰そのものは、神仏習合の神さんだということわかりますね。で、次にインドで生まれた仏教が中国に入って、それから日本に入って、その都度姿を変えていきます。教えの内容、変わっていきます。その様子をちょっとイでご覧いただけます。

インドで生まれた仏教は、中国を経由してわが国に伝来したが、そこで広く伝播するには、既に定着していた原始神道への譲歩も必要だった。僕さっきちらっと言いましたね。やっぱり広めていくためには、もう教義に凝り固まって、これ以外のことは一切話しませんっていうのでは困るので、受け入れやすくする。で、その中で一番インドで生まれた仏教との違いは何だったかっていうと、先ほどもちらっと言いましたが、「先祖崇拝」です。日本人もともと先祖崇拝をしてました。ほいでそれが本来のインド仏教にありません。お釈迦さん、そんなん説いてません。お釈迦さんって輪廻を説くから、先祖を崇拝して、成仏させようっていう気はないです。で、そこで先祖崇拝に配慮する必要があるって、ほいで日本仏教って、ほとんどが葬儀を行いますね。悪く言うと、江戸時代には何か葬式仏教なんて悪口言われるぐらいに葬儀を重視するのは、これは明らかに神仏習合の結果、変わってしまった日本仏教です。いいですか。ただこれ厳密に言うと、ちょっと丸括弧の中に入れてきましたが、こんなん言わんでええのに、こら辺が研究者の弱みですね。厳密に言うとかんと、「知れへんのちゃうか」言われたら嫌やから言います（笑）。いいですか。インドからいきなり日本に来たのではなくって、中国に渡った段階で、中国も実は先に広まっていた儒教、これも民間信仰ですよ。儒教の影響で、もう既に中国の仏教自体が先祖供養をやってます。ほいでその要素をさらに日本に来て強めたのが、日本仏教です。で、具体的

にじゃあ、さっきは民間信仰の代表として、天神信仰を挙げました。今日の後半の話の都合で、こちらの園城寺、天台寺門宗の創唱宗教としての側面を見ていきますね。

開祖の智証大師、円珍。これは福家さん、カシヨウ？ワシヨウ？（福家氏「カシヨウ。」）

カシヨウ。円珍和尚の教えを引き継いで、ほんで教義に顕・密・修験の三道の鼎立ですね。このもとに智証大師流の密教と、天台系の修験。これ聖護院が本山に今なってますが、本山派修験道が両方合体してっていうか、修験道を中心に取り込んだかたちの教団なんですね。で、本山はこちら園城寺っていうことになります。そうすると面白いのは、この円珍和尚が説かれた教えのもとに来てるわけですから、普通世間一般で考えると、仏教の非常に偉いお坊さんだ、仏教のお坊さんが説かれたんだから、この境内には仏さんばかりかっていうと、実はそうじゃないっていうこと、もう既に皆さんお気づきだと思います。私も今日来るときに、長等神社から、三尾神社通って、こっちやってきました。で、ちょっとここ文章として整理したのは、本堂には本尊の弥勒菩薩。これ秘仏で拝見できないんですが、これを祀っていますが、新羅善神堂には、この園城寺の守護神。ここがポイントです。守護神、神さんですよ。で、新羅明神坐像が祀られている。そうかと思えば、熊野権現社には修験道の守護神である、熊野権現が祀られている。で、そう考えていくと、この園城寺自体はもう既に習合の結果としての仏教なんですよ。先ほど言いましたように、習合の結果っていうと、神道と仏教が対等っていうふうに思われたらいけないんで、先ほど言いましたでしょ。教義的に、それ無理なんです。神道には教義も何もないんですから。だから仏教の体系、仏教側の方が神道をどんなふうに取り込んで、一体化させたかっていうことなんです、その一番典型的な姿が、こちらの園城寺に見られるっていうことです。で、智証大師が中国に渡られる、勉強に行くために、中国に行かれますね。で、そのときに詠まれた歌が、こういうのです。「法の舟 さして行く身ぞ もろもろの 神も仏も われをみそなへ」私を見守ってください、荒海越えて、日本海の荒海越えて行くんですと。ここで「神」。いいですか。ここの開祖ですよ。開祖が「神も仏も」っていうふうに、うたってられるんです。で、これを戦後の神仏分離の時代のわれわれにしてみたら、「そんな、ええの？円珍さん、神守ってもらて、いいの？」って思われるかわかりませんが、これ当たり前です。日本仏教自体が、既に神を取り込んだ仏教です。いいですか。そういうことなんです。で、そういうふうを考えて、ちょっといくつか前を見ていただきますね。

（スクリーン：根本御影『東帯天神像』）これが根本御影っていうて、菅原道真っていうか、天神さんの絵なんです、北野天満宮にあって、日本全国の天神さんの絵の一番根本になるやつだっていうんですが、これご覧になって、もう完璧にこれ人間でしょ（笑）。こんな言い方したら悪いけど。何を見ていただきたいかっていうと、東帯を着てはるんですが、よく皆さんのイメージで言うと、源頼朝の東帯なんていったら、角ばってるでしょ。これ、なで肩みたいになってるでしょ。これ何だかっていったら、実は道真公の時代には、ああいう角ばった強装束っていうんですが、あれなかったんです。柔装束なんです。だからこれものすごくリアルに、生身の人間として生きてた頃の道真公なんですね。で、これも実は貴族が持ってた筈で、どれを見ても、この量もみんなそうなんです、この冠から。生身の人間。これがだから神様として祀られるっていうのが、先ほどお話しした、仏教の影響を受けて、初めて日本に生身の人間が神様になった。

（スクリーン：『智証大師坐像』園城寺蔵）それに対して、こちらが智証大師・円珍和尚ですが、明らかに修行中ってことがわかりますね。修行されている。さっきの道真公、ひよっとしたら、政務を執ってる姿かもわからない。ほ

いでこちらは、明らかにもう仏道、仏の道に入っているお姿でしょ。で、こういう違いついていうのも、これから皆さんがいろいろ絵をご覧になるときに、面白い違いがあります。

(スクリーン：新羅善神堂、熊野権現社)で、先ほど言いましたが、こちら(園城寺)には神様がいらっしゃる。今はこれは、お寺扱いなんですかね。お寺扱いですが、ただ歴史をたどっていけば、明らかに両方とも神様をお祀りしてたお社が、境内の中にあるってことです。新羅善神堂、ちょっと離れますけれどもね。で、こういうことを見てくださいと、この中のすごいなあと思うのを、こちらいろいろ本当に国宝や重要文化財、いいのをお持ちで。一つ欲しいなとか言っちゃいけませんね(笑)。でもすごいなあと思うものがあります。

(スクリーン：『新羅明神坐像』園城寺蔵)これを私、確か天王寺の美術館で初めて拝見して、すごく衝撃を受けました。さっきの新羅善神堂にお祀りしてあるはずなんです。伝説としては左のほうにありますように、円珍和尚が、唐に渡って勉強されて、ほんで帰ってくる途中に、確か船のへさきのほうに現れたとかいう話だったと思いますが、翁が現れて、それで「自分は新羅国の明神である」というふうにな乗って、「今後あなたが日本で広める教えを守ってあげましょう」と。これもどうですか。われわれの戦後の考え方から言うと、「神様が円珍和尚の教えが広まるのを、見守ってくれるの？」どっちが上やねんとか、下やねんっていう考え方になりますが、そういうものなんです。神仏習合っていうのは、まさにそういうものなんです。

(スクリーン：『三井曼荼羅図』園城寺蔵)で、今回ここに来ていただいている方は、チラシをご覧になってほとんど来ていただいていると思います。これは福家さんが、私がこういうテーマでやります言うたら、ちゃんとこちらでお持ちの曼荼羅図をチラシに入れていただいて、このデザインいいなあいうて、私の友達が言うてましたが、これで3人は増えたんですね、今日ね。で、9体の仏さんが描かれてるんですが、青く明記していたのが何だかっていったら、神道系です。この園城寺の神様を曼荼羅で描いたときに、こんなかたちで入り込んでくると。で、これを中途半端だとか、え?何?っていうふうにするのは、戦後の神仏分離の時代の考え方ですから、これが当たり前の日本の仏教の姿だっていうふうにご覧ください。で、次、レジュメに戻ります。2枚目のウのところですね。

ほいで、今までお話ししたのは、仏教の影響を受けた神道、あるいは神道の影響を受けた仏教の話をしました。実は影響を受けたどころか、その合体することによって、新しく生まれた考え方があるんですね。それがウのところ、私の思いつきですが、その色が濃いなと思うのを三つ、①、②、③って挙げました。一つは修験道です。修験道っていうのはもともと森羅万象に神がいると思っていた、日本の古神道、原始神道の時代に、山岳を歩き回るってこと絶対やってるはずなんです。神様のところに近づくと。それでそこに仏教が入ってきたときに、それを取り込みました。それで生まれたのが、これはもう東アジアにもない、日本独自の修験道の道があります。

そうかと思えば、先ほど日本で一番多く祀られてる神さんは、八幡宮だ、八幡神だって言いました。八幡神、今言いましたね。私、八幡に神つけて「八幡神」って言いました。これ何でそう言うかっていったら、戦後、八幡信仰は神仏分離されたから、八幡神だって言いました。でも、分離される前は、ここに書きましたが「八幡大菩薩」でした。いいですか。八幡神という神様が、菩薩号を持っている。もうこれはどっちかの影響を受けたとかいうよりも、神仏習合によって新しく生まれた信仰です。だからこそ日本で一番数が多いんです、八幡さんは。いいですか。今、日本の神さんをたくさん分けていきますと、八幡さんが1番で、で、2番目が皇大神宮。皇大神宮っていうのは、お伊勢さんの内宮です。3番目が天神信仰です。1番の八幡さんって何だかっていったら、江戸時代まではこれが習合したかたちの姿で、人々に

広まっていった。だからこの八幡大菩薩っていう名前はすごいんですが、これをつけられたのは、781年に朝廷が九州の宇佐八幡宮の八幡神に、これから菩薩、仏としても祀られるようになってということで、神仏習合の結果ですね。

それから、さっきもちらっとこちらの園城寺に新羅明神が祀られているとか、あるいは熊野権現が祀られてるって言いましたが、「明神」とか「権現」っていうのも、実は神仏習合の仏さん、神さんだっていうふうに思ってください。で、こういう神仏習合の結果、ほんでもう一つは道真が人間でありながら神になったっていうことの結果、それ以降たくさん生身の人間でありながら、明神になったり、権現になったりする人がいました。いいですか。それが皆さんよくご存じの、これ秀吉を祀ってるんです。これ大阪の人間って、ホウコク大明神って言うんです。京都はあれ確かトヨクニですね。豊国神社ですね。大阪、中之島にできたやつがあったんですが、それ豊国神社なんですよ。私、大阪だからどうしても、思わずホウコクって言いかけましたが、豊国大明神。それから家康は、もうこれ有名な東照大権現。権現です。明神です。こういう存在っていうのは、もう明らかに両方兼ね備えています。もちろん秀吉も家康も、日本の国の中の仏教徒を守りましょうとか、神道の氏子を守りましょうっていうような、そんな存在になりたかったわけじゃなくて、両方合わせてでしょ。だから明神とか権現っていうのは、当たり前なんですね。

(スクリーン：園城寺の「本山採灯大護摩供」)で、その話をまたちょっと前で見ていただくと、これこちらの山伏の姿をされてますが、こちらはかなり修験道の色彩を色濃く持っています。だからさっきも言いましたが、別に福家さんがいらっしゃるから言うわけじゃないんですが、日本の仏教の一番基本的な習合の在り方をいまだに引き継いでおられる。で、皆さんは逆に、「いや、そういう神道系とか、修験道とかないお寺のほうが、純粋な仏教だ」と思われるでしょうが、あれは政策の結果、そうってしまった仏教だと思ってください。仏教の本来のかたちは、こういうものです。

(スクリーン：国宝「僧形八幡神坐像」東大寺蔵) そうかと思えば、これ東大寺にある、さっき八幡大菩薩って言いましたね。そしたら、これ八幡大菩薩、神様なんですが、仏さん、仏教徒の僧侶の姿をしている。こんなかたちですね。

(スクリーン：「豊国大明神」を祀る豊国神社) そうかと思えば、これが豊国ですね。豊国大明神を祀る、京都の博物館のちょっと北側にありますが、ここが祀られたり。(スクリーン：「東照大権現」を祀る日光東照宮) あるいは日光東照宮が祀られたり、こんなかたちで神仏習合の体現するかたちで、明神とか権現が祀られたって話をここまでしました。で、そのあと3番目、算用数字の3番目に入りますが。

一、 3、神仏判然令(神仏分離令)

これはご存じだと思いますが、慶応4年っていうことは、明治元年ですね。3月13日に、明治維新に伴って、太政官布告。明治新政府が「仏教徒、神道は分けてしまいなさい。神と仏は分けてしまいなさい、神社と寺院を切り離しなさい」ということを決めました。つまり日本の本来の在り方である神仏習合を否定したんですね。あれはもう私は愚策としか言いようがない。で、分離しろって言いました。だから「八幡大菩薩」っていうのは使ったらいかんってことになって、それで現在は「八幡神」っていうの、そのせいです。結果としてね。で、さらにすごいのは、それだけでは解決できなかったのは何だっけと思ったら、先ほどのところの①、②、③って書きましたね。これらが分離しろって言われても、「いや、私たち、その習合した結果生まれてるのに、どこをどう分離するんですか」ということで、もめますね。ほれで結局明治5年に何したかっていうと、例えば修験道の問題で言うと、「修験宗を廃止しろ」とまで言うんです。もういかに愚策かっていうことなりますね。で、こんなかたちで神仏を、分離令って言うけど、法律の名前、「神仏判然令」なんですが、で、こんなかたちで日本の本来のあるべき姿としての神道、つまり原始神道ではない、仏教の影響を受けた神道ですよ。

それからインド仏教とも、中国仏教とも、ちょっと変質した日本仏教ですね。この二つが一体化して、どちらかというところと仏教のもとに神道が入り込むかたち、これ後半の話で如実に出てきますが、入り込むかたちで、一つの宗教体系ができた。信仰体系ができた。どうですか。ここまで聞いていただいて、皆さん思われてた神仏習合って、ちょっとイメージ違うなっていうことお気づきいただけました？面白いなと思っていただけました？そう、思われたら、ジェームズ＝ランゲ説の成果ですね（笑）。で、何やと思われた方は、反省してください（笑）。いいですか。ジェームズ＝ランゲはそう言ってます。で、そこでいよいよ私が専門にしている分野の話を、今までの話を踏まえたかたちで、お話ししたいと思います。

二、「寺門-安楽寺天満宮」と「山門-北野天満宮」 1、道真信仰と天神御霊信仰

二番目のタイトルに寺門派、それから山門派。こちら天台の中の園城寺のほうは寺門、それから比叡山のほうを山門っていうのはご存じですよ。高校の教科書にも出てきますが、で、これ線を引きました。寺門に安楽寺天満宮と、山門に北野天満宮できました。この安楽寺天満宮っていうのは、皆さんのご存じの名前で言うと、戦後は太宰府天満宮ってなったとこです。あそこもともとお寺やったんです。神仏習合でね。で、その話を今からします。

まずですね。いいですか。この安楽寺天満宮っていうのは何の神社だったっていったら、1 に書きましたが、「菅原道真をお祀りする」祖先崇拝の神社でした。お寺でした。で、天神御霊信仰、「天神さんのたたりを鎮める」ための信仰、これ天神御霊信仰っていいんですが、これの頂点にあるのが、北野天満宮です。ほんで、ここで歴史をやる、考えるときの大事なことを言っておきますが、われわれどうしても現在から過去を見てしまいますね。そうすると現在は北野天満宮も、太宰府天満宮も、一つの天神信仰の神社だと。だから一緒だと思われるかわかりませんが、現在はそうですよ、現在そうだからって言って、過去もそうだとはいえません。今から、成立した当初の話をします。で、先に結論。わかりやすくするために、先に結論しますが、相反するものでした。安楽寺天満宮、つまりイコール太宰府天満宮ですが、これと北野天満宮、相反するものでした。それを簡単に言うと、安楽寺天満宮は菅原道真を祖先として「祀る」神社であって、北野天満宮は道真のたたりを「鎮める」ための神社だったということですから、性格が違うってことわかりますね。

どうしても、私もこんな偉そうに言いながら、現在の立場から過去を見てしまうっていう間違いを犯すのですが、これ歴史、過去を話すときに、一番やってはいかんことですよ。「今そうだから」って。だからさっきもちらっと言ったでしょ。現在天神さんが学問の神さんだからって言って、平安時代の中頃に生まれたときに、学問の神さんだと思うのはおかしいっていうのは気づかれたでしょ。本当に人間って、いくら偉そうなこと言うても、そういう間違いに、自分中心にしかもの考えられないっていうのがあって。ちょっと今、不意に思い浮かんだエピソード言いますと、昔々テレビで関ヶ原の戦いをシーンでやって、東軍が勝ちますね。で、家康が勝ったあと、家康の家臣がわ一つと寄ってきて、家康に何て言ったかっていうと、「殿、この関ヶ原の戦いの勝利、おめでとうございます、これによって徳川 200 年の政権が固まりました」って言ったんです（笑）。むちゃくちゃ笑うでしょ。それ書いた人やっぱり、現在からしか見てないからそうなんです。で、今、皆さん笑われていますが、おんなじことよそでやってませんかっていうことです。今がこうだから、過去もこうだったっていうふうに思われてませんかっていうことです。

それでいよいよ、安楽寺天満宮の話します。延喜 3 年に道真が太宰府で亡くなります。で、その 2 年後には安楽寺、

もともと安楽寺ってお寺あったんですが、その境内に味酒安行（ミサケノヤスユキ）っていう人。これ道真の従者。都からずっと太宰府までついていった家来です。今、このご子孫がね。ごめんなさい、ミサケって言ったらいかな。この当時ウマサケです。味酒安行です。ほんで現在この子孫の方、味酒（ミサケ）さんって、今、太宰府天満宮の文化研究所にいてはります。すごい家なんです。で、その道真の家来として、太宰府までついていった人間が、自分の主人が亡くなったからっていうんで、廟寺を造ったと。ほいで天原山の廟院として安楽寺っていうのを、新しくその境内に造った。ということは、祖先崇拜の寺院だったってことがわかりますね。言い換えると、菅原道真信仰の施設を造りました。ところがそのあと、先ほどもちらっと言いましたが、天変地異が起こって、特に藤原氏あたりが、これは怖い。「何とか道真の霊を、怨霊を鎮めないかん」というんで、この安楽寺を神社にしていくんです。ほんで安楽寺天満宮っていうかたちにするんですね。そこに書いときましたように、醍醐天皇のときですね。左大臣の藤原仲平に命じて、道真の霊を鎮めるために、安楽寺の地に安楽寺天満宮を造りました。もう一回言いますが、これが現在の、戦後太宰府天満宮になるんですよ。で、これが一方で出来たんですが、それとは別に北野天満宮が京都に出来ます。

道真が亡くなったあと、天変地異が続きます。で、京都にはたくさん反道真派の藤原氏を中心とした勢力がありますが、その人たちがみんな早死にするんですね。何か 10 歳未満で亡くなった皇太子もいますが、で、それ道真のたたりだっていうことで広まった。で、朝廷は道真を太宰府へ追いやった、その左遷の詔勅を撤回します。ほいで右大臣正二位を追贈する。で、そのあと、それでも天変地異が続くんですね。不作なんかが続きます。そうするとこら辺からちょっと怪しい話になってくるんですが、942 年には京都の右京七条に住んでた、多治比文子っていう巫女さんですが、これに道真の声が聞こえて、「私を守れ」と言ったというんです。この場所は実を言うと、京都駅からちょっと北に上がったとこに、文子天満宮ありますね。あそこの場所はそうなんですよ。ところがこの人、巫女さんだから、そんな言われてもって行って、自分の邸宅の中にちっちゃな祠を造っただけだったんですね。そしたらそれだけではあかんかったみたいで、947 年には今度近江の国、比良の神主の神良種っていう人の子どもの太郎丸。大体お告げが下るっていったら、女性か子どもなんですね。成人男子には下らないのは、やっぱり私が汚れてるからですかね（笑）。何なんでしょうね。不思議に歴史的には、そういうことになってます。で、ちっちゃい子どもの太郎丸に、「私を祀れ」と言われます。朝廷も今回は放っとくわけにいかんっていうんで、朝日寺っていうところの最鎮（最珍）っていうお坊さんに命じて、現在の北野天満宮の基になる施設を造らせるんですね。いいですか。だからここはもう最初から怨霊を鎮めるための信仰ですから、天神御霊信仰です。で、このアとイで何が言いたかったかっていうと、片方は道真を祖先として祀るところ。で、片方はたたりを恐れるがあまり、それを鎮める神社。全然別のもんでしょ。さあ、こっからが今日の本論に入っていくんですが。

じゃあこの安楽寺天満宮っていうのは、どんなふうには支配、組織、運営されてたんだろうっていうことを見るために、そのトップの役職を別当職っていうんですが、いいですか。これ調べました。そしたら 947 年に菅原氏が朝廷に願い出て、安楽寺天満宮の別当職は、道真の孫である菅原、これ何て読むんでしょうね、ヒラタダでしょうか。普通われわれ「ヘイチユウ、ヘイチユウ」と言ってますが、平忠が安楽寺の初代の別当に補任されるんですね。これは菅原氏からの願いで、恐らく言い方としては、「安楽寺天満宮はもともと道真公をお祀りするための安楽寺だったんだから、そのトップはいつも菅原氏であってほしい」ということで、願い出たんだと思います。ほいで願いました。で、そのあと歴代もずっと菅原氏が任じられてるんですが、3 行目「しかも…」から見てください。しかも 1020 年には菅原為紀の子で、そ

れまではここで、園城寺で、修行されていたお坊さんの増守って方が、別当に任命されます。確か 10 代別当になった方です。すごいこの人、重要な人なんです。ほんで、そのあとは、1071 年には菅原孝標の子どもで、やはり園城寺のお坊さんであった基円が。この人 12 代ですね。増守が 10 代。この人基円が 12 代。で、そのあとまた 1159 年には、菅原為庸の子どもで、やっぱり園城寺のお坊さんであった定快。この人 13 代です。基円、定快、続いてたと思います。が、任命されている。つまり安楽寺っていうのは、道真公の先祖崇拝の神社だったんですが、そこのトップは、いいですか。菅原氏の血を引くのは当然ですけども、一旦ここ園城寺で勉強されてるんです。つまりこの園城寺と安楽寺天満宮っていうのは、実を言うと支配関係にあつて、これが今の現代の人間、わかりにくいんですが、いいですか。どう言ったらええねん。園城寺の末寺じゃないですね。安楽寺天満宮、神社やから。末社。「お寺の末社」っていうと、ちょっとびんとこないかわかりませんが、そうなんです。安楽寺天満宮はこの園城寺を本山と仰ぐ神社なんです。こういうかたちが人脈の上から見えてきます。

ちょっとそのことにかかわることで言いますと、あとでもう一回お話ししますが、比叡山延暦寺とここと、対立関係にあったことご存じですよ。そうするとあの道真公をお祀りして、安楽寺天満宮ができて、それが園城寺の配下にある、末社であるっていうことに対して、比叡山はよく思わないでしょ。そうするとやっぱり願い出てます。※をご覧ください。1118 年ですが、山門は「安楽寺の別当を延暦寺の僧から補任するように」と。いいですか園城寺ではなくて、延暦寺の僧侶から選んでくださいと。ほんでそういうこと願い出て、このあと頻りにこの動きを加速させていきます。ほいで、先に結論言つときます。既に北野天満宮は、比叡山の末社なんです。だから両方手に入れようとしたんです、比叡山は。それが自分と対立関係にある、園城寺の配下にあることが許せなかったでしょうね。で、具体的にそのあと、これは行の最後に書いてありますが、1162 年の、文章も残ってます。『百練抄』っていう史料にあるんですが、「安楽寺を以て延暦寺末寺…」と。これ末寺っていうけど、このときもう安楽寺天満宮ですけどね。「…末寺たるべきの由、天台衆徒訴え申し下洛を欲す、諸卿…」これ宮中において、「…を召し、殿上において群議あり、…」皆、会議したけど、「…裁許あるべからず」これやっぱりいろいろ調べたうえで、やっぱり北野天満宮は比叡山のもとにあつてもいいけれども、安楽寺天満宮は園城寺の配下だつていうこと、朝廷が認めたつていうことなんですよ。で、じゃあ、気になるのは北野天満宮の別当ですよ。これが 3 枚目の紙になります。

北野天満宮の場合、正の別当と権の別当に分かれるんですが、正の別当のほう読んでみますね。995 年に初代の別当になったのは、比叡山の座主を出したりしてる曼殊院ですね。そこの初代の門主であった是算が補任されています。で、以後歴代の別当は、大体曼殊院の門跡が兼務するんですが、その家系としては、是算は実は菅原氏なんです。菅原道真の子孫なんです。だからこれ初代の別当は、やっぱり北野天満宮いえども、菅原を任命せざる得ないなつていうんで、任命したんですが、このあと 1 人として菅原氏入りません。もう完璧に北野天満宮は比叡山側に入りますので。具体的にはその 3 行目読みますと、すべて菅原氏以外の出身で、藤原とか、源氏とか、平氏の人間で、延暦寺で勉強した人が北野の正の別当になります。ただ力を持つてんの、圧倒的に藤原氏ですけどね。

じゃあ、権の別当、つまり副別当ですね。は、どうなんだつていうと、基本的に延暦寺や、園城寺や、真言宗、仁和寺ですね、で修行してたお坊さんから任命されるんですが、菅原氏の一族が任命される。つまり菅原氏で、もちろん菅原氏でも延暦寺で勉強する方いらっしゃるやいました。延暦寺、あるいはここ園城寺、あるいは仁和寺ですね。そこで勉強した菅原氏を任命した。だから 1 番目は、トップには菅原をつけない。それをつけてしまうと、菅原の配下に入るいうこ

とは、園城寺の下になっちゃいますから、そういうかたちを取ってます。で、初代の権の別当になったのは誰かっていうと、さっきの増守です。増守が 1053 年に任命されてます。覚えてらっしゃいます？園城寺のお坊さんだって、そのあと安楽寺の別当になった人。この人が権の別当になってます。これは何だっていうと、やっぱり道真公をお祀りする神社なんだから、菅原氏がかかわってないとおかしいよと。かといってトップでかかわられると、北野も安楽寺もどっちも園城寺の下に入ってしまうから、だからかかわらせるけれども、副別当としてはかかわる。なかなかの政策ですよ。そういうかたちを取られました。

で、※を見ますと、これより少し前の話なんですけど、976 年には菅原文時が「北野社の事務を氏人から、菅原氏から選びたい」って、ちゃんとやっぱり朝廷へ願い出てるんです。あそこはうちの先祖が祀られてるんやから、うちの一族からって。ほんでそれに対して朝廷は、11 月 7 日ですが、「太宰府安楽寺、つまり安楽寺天満宮の例に任せて、菅原の人間を北野のトップにさせましょう」っていう、太政官布を出してます。出してるにもかかわらず、初代の正の別当が是算だけで、あとは全部藤原家になっていきます。こんなふうには北野天満宮と安楽寺天満宮、つまり太宰府天満宮は、かなり違いますねって話ですね。このあと時間がなくなってきたんで、大急ぎで話をしますね。2 番ですが。

二、 2、山門・寺門の確執

これはもうどうでしょう。飛ばしてもいいぐらいかな。こちら（園城寺）の円珍さんの流派、法脈ですね。それと円仁さんの、比叡山のほうの法脈とが、対立関係が起こったっていうことを 2 のアに書きました。ほいで実際には、この山門と寺門の確執があって、これすごいですね。こちら焼かれることが多くって、9 回も焼かれて。で、また今のような立派な伽藍ができて。これ「不死鳥の寺」とかおっしゃるの、すごわかりますね。こんだけ焼かれて大丈夫なのって。私、1 回転んだらもうあかんタイプやから（笑）。すごいなあと思いますが、で、そこら辺もう飛ばしますね。

ほいで、「参考」っていうところをご覧ください。こういう関係になります。延暦寺のもとに、配下に、末寺って言ってもいいと思います。末社、末寺として、北野天満宮があって、で、それは天神さんの霊を鎮めるための、怨霊を鎮めるためのもので、それを裏で動かしてたのが藤原氏。で、園城寺の下には太宰府天満宮、安楽寺天満宮があって、これは道真公を祖先として崇拝する神社であって、それは菅原氏がかかわっていた。

で、こういうふうにならざるに二つの大きな体系ができますが、いいですか。今日は時間の関係で、こんなことしか話してませんが、日本全国の政治家たち、貴族たち、ほかの仏教も全部この二つのもので分けられていきます。これはすごく、時間がない言いながら、すごい大事なこと思い出したから言いますが、われわれ学校教育で、ものすごくいろいろを教えられてるんですが、「鎌倉新仏教」っていうところで、新しい浄土宗や、浄土真宗や何か出てきたら、もうその段階で教科書から天台系の話出てこないでしょ。そうすると皆さん全員が、「もう古いお寺は、もう一旦下火になって、ほいで新しく生まれた新仏教が日本の主流なんだ」と思われるでしょ。あれは明らかで、ああいう新しい教えが出て、国家としての在り方はやっぱり比叡山と園城寺がトップです。ずっとトップです。いいですか。だから江戸時代の天皇のお葬式だって、全部この両方が交互に行ってます。トップなんですよ。教科書って、そういう意味で非常に困るんですね。時間ないのに、どんどん、私、時間ないときどんどん横道それますが（笑）。例えば皆さん、江戸時代で身分制度として、「士農工商」があったとか習いはる。あれ今、教科書に載ってないの存じですか。あんなお孫さんとか、お子さんにしゃべったら笑われますよ。「士農工商わかってへんのかい」、「え？何それ？」って言われて、「おまえ、士農工商もわからん」と

って言わんといてくださいね。今、教科書で教えないです。あれうそやったんですから。その話、また次回やりましょか（笑）。ほいでそれと一緒に、つまり鎌倉新仏教のところで、一番大きな誤解は、最も勢力を持っていた延暦寺と園城寺の力を教科書から書かなくなって、で、新仏教のことばかり書いてますやん。あれうそです。新仏教もこの両派の中に放り込まれていきます。だからここに書いた 2 本線、ずっとラインの中に、日本の政治・経済・文化すべてが、この二つに分けられます。いずれその本書きますけどね。そういう世界があるんです。で、今日はちょっと天満宮とのかかわりだけで書いときました。ただ園城寺の下のほうに、「臨済宗」って書きました。これまだ全然出てきませんでしたね。これの話を今からします。三番目、「渡唐天神」の話をして。

三、「渡唐天神」伝承 1、「渡唐天神」伝承の梗概

「唐に渡った天神さん」っていうんですが、この話はあらすじこんなんです。三の 1 を読みますね。1241 年に太宰府の崇福寺っていうところに、円爾っていうお坊さんがいました。聖一国師っていうんですが、この人のもとに天神さんが現れたっていうんです。いいですか。天神さんが亡くなるのは、西暦で言うと 903 年です。大丈夫ですか。903 年に亡くなってます。ところが 1241 年になって、太宰府のお寺に現れたんですね。ほんでこの円爾ってお坊さんに、この人臨済宗系のお坊さんですが、「弟子にしてください、ほいで臨済宗を教えてください」って言ったんですね。そうすると円爾が、「いやいや、私なんかとんでもない、あなた、神様じゃないですか」って。「神様に私、教えることなんかできないから、私の師匠が中国にいらっしゃいます」と。ほいで、「その中国の無準師範っていう方に弟子入りしてください」って言ったんです。そしたら天神さん、すごいですね。「わかりました」って言って、一晩のうちに日本海を飛び越えて、中国に行きました。で、当時の中国は宋っていう国です。唐っていうのは中国一般の名前ですから、唐の時代じゃないですよ。宋の時代ですが。宋の径山っていうところの万寿寺っていうところに、この無準師範がいらっしゃいました。ほいでこの無準師範に弟子入りさしてくださいって言って、ほいで「授衣印可」っていいますから、結局臨済宗の教えを全部受け止めて、で、日本に帰ってきはる。また日本海をひとつ飛びで帰ってきはります。このとき授衣って書いてあるのがポイントで、その証拠に、教えを習得した証拠に、衣をもらうとか、袈裟をもらうとか言い方しますね。で、帰ってきたと。で、そのときの伝承に基づいて、たくさん「渡唐天神」。これ一つ代表的なん挙げました。（スクリーン：渡唐天神像）ポイントは何かっていったら、皆さんからご覧になって、左腰のところに赤い見えてます。あれポシェットです。あそこに無準師範からもらった衣が入ってます。ほいでもう一つのポイントは、梅の枝を持ってます。これ中国から入ってきた花なんで、梅の枝を持ってます。で、こういう絵が山ほど描かれます。いいですか。じゃあ、この円爾っていう人、つまり菅原道真の、これ幽霊って言うて、昔、某天満宮で講演したときに、「これ、こんなもん 903 年に亡くなってんねやから、1241 年に現れたのは、道真公の幽霊ですよ」って言ったら、あとで怒られてね。「神様は幽霊になりません」って。ここは、まあいいことにしといてもらおう（笑）。

で、幽霊が認めた円爾ってお坊さん、太宰府にいたお坊さんは、どんな方だっていうと、この方が何と、やっぱり園城寺のお坊さんなんです。ものすごいかわりが深いんですよ。ほいでちょっとそれを見ましょか。そうか、先に、絵をちょっとご覧いただく。（スクリーン：『聖一国師像』東福寺）これが聖一国師です。円爾ですね。この方、あとで見ますが、京都の東福寺の初代、東福寺造った方ですから、今東福寺に残ってます。（スクリーン：国宝『無準師範像』東福寺蔵）で、これが無準師範です。これも東福寺にあります。

(スクリーン：『聖一国師年譜』)で、聖一国師の年譜っていうのがあります。これ読んで私、びっくりしたんですが、赤で囲いましたが、円爾が18歳のとき、いいですか。これちょっと確か文章書き下しました。このままで読みにくいので、書き下しました。1219年ですが、レジュメご覧ください。「師…」、師っていうのは、これ書いた、この年譜を書いたのが円爾の弟子ですから、鉄牛っていうお坊さんですから、師、私のおっしょさんである円爾はっていうことですね。「師十八歳。…」のときに、「…智証の遺跡を慕しくして近州…」、本当は「江」の字を書くんですが、昔はキンシュウって言ってました。「…園城寺に入り、髪を切る」と。で、10月20日には「…東大寺に詣で、登壇受戒す」と。戒壇院が当時は比叡山との関係で、こちら園城寺は戒壇院持てなかったもんですから、東大寺に行って、本当はだからこの円爾は智証の教えに従ってた方ですから、ここで戒壇したかったんだと思いますが。ほいで一旦東大寺に行って、あっちこち修行して、もう一回22歳で、1223年ですね。園城寺に戻ってこられます。ほいで「一日自ら思いて、以為らくは、我此の年、大小乗…」大乘、それから小乗。今、小乗って言うと、差別だっていうんであかんのですが、何でしたっけ。上座部かな。上座部仏教っていうんですが、「…を学びて権実の教えを究む。」本当の教え、その実生活の教え、両方勉強したと。で、それでも何か物足りないことがあって、どうなったかいうと、今度は臨済宗のほうにいきます。ここから地の文章でいきますと、この後、栄西の高弟に禅戒を受けて、34歳のときに中国の径山に渡ったと。さっき、天神さんが飛んでいったっていうあの話は、この円爾が実は行ったとこなんです。伝説ってそういうふうな、元ネタがあるんです。で、径山に渡って、万寿寺の無準師範に禅を学んで、帰国してからは太宰府の崇福寺。現在福岡にもすごい大きなお寺になってますが。それから博多の承天寺を造って。で、のちに天皇に招かれて、京都に来たあとは、あの東福寺ですね。東福寺を開創。ちょうど今の季節、山ほど観光客が来るところですが。

で、この方の教えは、円爾の教えは何だっていうと、臨済を学んで、臨済のお寺を造りますが、真言も天台も説く、「禅密兼宗」を旨とする。これ明らかに、ここの園城寺での勉強が、そのまま影響してるっていうことなんですね。で、じゃあ、こういう不思議なこの円爾のもとに現れた天神さんっていうのは何なんだと。皆さんにしてみたら、「そんなのうそに決まってるやないか」と思われるかわかりませんが、私なんかはそうじゃなくて、「うそはうそやけど、何でそんな話が作られたんだろう」って考えるんですね。そうするとこれは村田正志さんっていう人が、ちゃんと答える的なこと書いてはります。2にいきます。

三、 2、「渡唐天神」伝承の成立

聖一国師の門流に属する禅僧が、つまり臨済宗のお坊さんたちが、南北朝時代に承天寺とか、崇福寺、つまり円爾の入ったお寺ですよ。などを中心として、この話を作ったんだろうと。そのときに非常に大きな勢力になっていた天神信仰を利用しようとして、太宰府天満宮の神威を借りて、その臨済宗の発展をもくろもうとしてやったユニークな方法なんだっていうふうに言われてますが、これ事実そうなんですね。で、ただこんなふうな言うと、これも何回も同じこといいますが、現在のわれわれいうと、「ちょっと待ってよ、仏教の臨済宗広めるのに、太宰府天満宮の神さん借りたら、あかんやん」って思われるでしょうが、神仏習合ってこういうものなんです。全然おかしくも何ともないです。この勢力に乗ってっていうことです。だから「道真公でさえ、円爾の教え、無準師範の教えを得ようとしたんだよ」っていうことを言うわけですよ。で、できたのが、この渡唐天神の物語なんですね。

三、 3、天神に無準師範から授衣

この物語を見ていくと、具体的な文献としては、3 の①、②、③に載ってるんですが、『兩聖記』っていうのを見ると、昔、無準和尚が径山にいたときに、「北野天満天神ある夜半ばかりに日本の菅丞相…」菅丞相っていうのは、菅原道真ですね。私は道真ですって言って、教えを受けて、「…受衣ましましける…」、衣をもらったって書いてます。ほいで『碧山日録』っていうのは、さっき見ていただいた絵を、「授衣天神」って書いてます。「渡唐天神」とは書かずに。授衣って大事なんですね。ほんで『菅神入宋授衣記』、菅神が入宋、中国に渡った。その授衣記っていう、タイトルからして授衣記。衣を授けられたっていうんですね。ほいで「天満天神、径山伝授の僧伽梨を以って西都…」、西都っていうのは太宰府です。

「…の靈岩に安置す」っていうんです。いいですか。このもってきたものを、天神さんが日本海飛び越えて、また帰ってきて、もってきた衣は現在ちゃんとありますよっていうんですね。どこにあるかっていうと、太宰府に行ったら、ここに埋まっています。(スクリーン：「伝衣塔」太宰府市) 伝衣塔っていうのがあって、この右っかわの大きい石のあれ。一回皆さん、行きませんか一緒に。夜中にこれ掘ると、中から衣が出てくるはずなんです(笑)。で、いまだに、これすぐ近くに太宰府天満宮もあるんですが、で、こういうふう「授衣」が大事だっていうことなんですね。

そうすると道真公が、天神さんが中国に渡って臨済宗勉強したっていう物語は、臨済系のお坊さんにとって、非常に都合のいい話で、「でや、おまえたち、天神さんを拝んだらかわからんけども、その天神さんだって臨済宗を学びに来てんで」っていうことですよ。そういう物語を作ったのわかるんですが、なぜ衣がポイントなんだろう。①、②、③とも授衣って言葉使ってますから、非常にここにポイントを置いていますね。で、これ何だろうっていうと、何のことはない。やっぱり世の中の伝承って、作られるときにはモデルがあるんですよ。もう一回『聖一国師年譜』を見ると、あそこに何書いてあるかっていったら、何と、いいですか。円爾自身が、道真が訪ねていった最初の人が円爾ですよ、この円爾自身が中国の無準師範から、衣もってるんです。このことをモデルにして作ったの、丸わかりですよ。いいですか。ほんでそれを4番に挙げとききました。

三、 4、円爾にも無準師範から授衣

1242年。42年っていうことは、円爾がもう中国から帰ってからです。郵便で届きました。郵便で。これ円爾は日本に帰ってから、中国の無準師範と手紙で何回もやり取りしてます。その手紙も大体記録残ってますけど。で、向こうから来ました。「便中に就いて、錦の法衣一頂、…」をあなたにあげよう。ほんで、「…乃ち先輩、…」先輩の私が「…尊宿…」偉いお坊さんになったあなたに、これを、衣あげましょう。だからこれから説法するときには、これ着て、皆さんに説法説きなさいっていうことを、これが『聖一国師年譜』に出てくるんですよ。で、いいですか。※のそこ、ここを見て、皆さん「ぎょえっ」と驚いてください。円爾の弟子が、この『聖一国師年譜』を作ったんですが、これを編纂した円爾の弟子の鉄牛円心は、実は道真の子孫です。いいですか。だからこの人、ちょっと私、今記録押さえないんですが、この人も園城寺で学んでる可能性高いなあと思ってるんです。だからこの道真の子孫は、自分の師匠である円爾のところに、自分の先祖である天神さんが訪ねてきたって話を作ったんです。そして自分の師匠の円爾が、無準師範から衣をもらったっていう伝説を基に、天神さんがもらったっていうふうにしたんですよ。で、そうすると私、これ(「伝衣塔」)の下には、実はもちろん天神さんがもらった衣なんてあるわけがないんですから、こんなこと天満宮でよう言いませんよ(笑)。でもここ、園城寺やから言います。ないんですから。ここに入ってるのは、実は円爾がもらった衣だと思いませんか？それを仕掛けることができるのは、円爾の弟子であって、しかも道真の子孫の鉄牛円心しかないですよ。っていうふうな話なんです。で、しかもこれのちに面白い話が出てきて。5番目にいきます。

三、 5、光明禅寺の「伝衣塔」

1271年に博多承天寺の鉄牛がいてたときに、天神がまた現れたっていうんですね。ほいで無準から授けられた法衣を、鉄牛に手渡して、「これ実は私、日本海越えて行ったときに、もらってきてん、無準師範からもらってきてん」って。「これちゃんとしかるべく安置しなさい」って言って。で、それを聞いて鉄牛は、太宰府にお寺、光明禅寺、ここものすごく観光客の多いお寺ですが。そのお寺を開いて、そのすぐそばに、この伝衣塔を作ったっていう伝説があります。で、こんなふうにして考えていくと、どうですか。皆さんが思われていた、さっきの話の繰り返しになりますが、鎌倉以降は新仏教のもとで、日本の宗教界が動いてたかのような教えられ方してますが、実はそうじゃないんですよ。比叡山と園城寺のこの二つが、すべての勢力、もう政治・経済・文化全部に、ものすごく大きな影響を持ってたっていうのが見えてくる。で、そのうちの今日は一部しか話してません。もしも「それ以外も全部話せ、浄土真宗はっていうたら、どっちにどうなんねんっていうことを話せ」って言われたら、また来年、はい（笑）。

おわりに-神仏霊場会-

このぐらいで、今日の話はまとめに入らなあかんですが。そうすると、冒頭のほうから言いましたけれども、われわれが思ってる神仏習合とか分離っていうのは、どうも一筋縄ではいかない。特に江戸時代あたりまでは、幕末ぐらいまでは、仏教のもとに神道が取り込まれるかたちで、一つの宗教体系だったわけですから、それを分けたっていうのは、明治の神仏判然令っていうのは、明らかに愚策ですよ。間違った政策でした。ほいでこんな間違った政策があり得るんだらうかと思ったら、ようやく最近になってから、「いや、やっぱこれおかしいで」っていうことになってきて。

で、最後まとめに入りますが、皆さん「神仏霊場会」ってご存じでしょうか。ちょっと読みますね。有名な山折哲雄先生が言い出して、明治維新以前の神仏同座とか、習合って言い方したっていいんですが、神仏和合の精神の復活を目指して、近畿を中心とした125の社寺に声をかけて、ほいで2008年、平成20年から神仏霊場会っていうのが発足しています。で、その後入れてほしいっていうところがたくさん出てきて、現在は152の社寺がここに加わっています。ほいで皆さんにこれらの神社、お寺を、ずっと巡拝していきましょうっていうふうなことをキャンペーン張ってます。

（スクリーン：地図 道真・天神の通った経路）大事な忘れちゃった。研究者って、今日の話こんなに入れていいのに、研究者って自分の見つけたこと話したがりなんです（笑）。京都から太宰府に、この青い線見てください、京都から太宰府に、これ何かわかります？「飛梅の伝説」です。京都の道真の屋敷から太宰府に、流された道真を慕って飛んでいったっていうんですね。この方向見といてくださいね。で、このあと天神さんは太宰府から径山の万寿寺に飛びますよね。いいですか。驚かんといてくださいね。今その万寿寺に飛んだ航路、飛んだ線入れますね。（径山-太宰府-京都が、一直線上にある。）びっくりしません？あの鉄牛円心って、むっちゃくちゃすごいプロデューサーです。いろんなこと考えてるんです。ちなみにここ、天台って見えます？天台山。円珍さんたちは、ここへ行ってます。ところがあのラインから言うと、杭州の径山っていうところ行かなあかんです。あの線を引き継ぐために。それは何の意味があるかっていうのは、もう今日はやめときます（笑）。

（スクリーン：『神と仏の道を歩く』）神仏霊場会に戻りますが。こういうパンフレットを出して、レジュメにも書い

ときでしたが、近畿を六つの地域・県に分けて、伊勢だけ別格扱いなんです、神仏を巡礼するためのコースを作ったりしています。ほいで滋賀県の場合、「欣求の道」っていう名前なんです、入ってるのがこれだけです（18 社寺）。で、これご覧いただいたら、もう神社とお寺関係なく交じってますよね。で、このこと自体当たり前なんです、私に言わせれば、ここにある神社は、八幡宮もありますが、すべて仏教の影響を受けた神社です。冒頭に言いましたね。神社建築自体が、仏教建築のまねですから。いいですか。で、お寺のほうも、例えば園城寺を代表として、中にたくさんの神社を持っていますね。だからこういう動きっていうのは私、本来の日本の宗教体系をもう一回復活するっていう意味で、すごくいいなあと思っています。ただわれわれ、なかなか人間っていうのは、現代を当たり前に受け入れるしかできませんから、こんな写真見たらちょっと違和感ありますか。

（スクリーン：平成 15 年度神仏霊場会「国家安泰世界平和祈願祭」清水寺と石清水八幡宮による神仏合同祭典）お坊さんと神主さんが並んでる。でもこれ本当、何回も言います。本当に普通なんです。普通だったんです。明治以降ちょっと百何十年か違ってただけで、今またこういう時代に戻りつつあるってことです。（スクリーン：平成 29 年度の同祭典@須磨寺）こんな感じです。私、大阪天満宮にいて言いましたが、大阪天満宮でもこの大会があって、本殿にお坊さんたくさん入りはって、日頃神主さんしか見てませんから、偉そうなこと言うてる私自身「おいおい大丈夫かな」と思いましたが、冷静に考えたらそういうもんなんです。それが本来の日本の信仰体系だと。ほいで、それらは一つになって、神社とかお寺とか関係なく、一つになって、大きな体系ができてたトップに、園城寺と延暦寺二つが君臨してたというふうな話で、この話面白いと思われたら、行の最後を書いてある私の本を読むことですね（笑）。この本（『奇想天外だから史実』）ですが、買ってくださいっていう宣伝で終わりたいと思います。どうもありがとうございました。